
今夜また星の下で

藤原陵平

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

今夜また星の下で

【Nコード】

N5968D

【作者名】

藤原陵平

【あらすじ】

貴方には、忘れてしまった『想い』がありますか 桜の木の下を通り過ぎ、そこで出会った女の子。俺は『運命』ってモノを信じようになつたよ。それでも神様は俺達に苦しみを下す。それも運命だつて分かつてるけど、認める事が出来ない事。君に会えて本当に嬉しいよ。それでも出会いは別れへの一歩。思い出になってくれれば良かったのに……「明日また空の下で」との別話ストーリー。
古河正晴、もう一つの物語。

1章 裸足の姫君

第1章

今日は綺麗な星空だ。

いつまでも眺めていたいほど綺麗な星空。でも、俺は眺める事をすぐにやめた。何故かって？ 寝ないと、星が見えなくなると、朝にならないだろ？

覚めたらそこは新しい日。

鳥の声も本当は爽やかなのだが、まだ眠気に支配されている体には毒だ。騒がしくしか聞こえない。ああ朝から騒々しい。

学校は何故こんなに朝早いのだろう。1日1時間とかでいいじゃないか、授業なんてさ。

学校に行くのも面倒だし、何か楽しい事でもあればな。

「桜の木かぁ。そういや、もう春だよな」

桜の木の下。そこで寝転がるのが日課だったりしていたが。今日は止しとこう。完全に遅刻してしまう時間だからな。たまには時間通りに行っただっていいかな。と血迷った俺を誰が責められよう。って、時間通りに行くのが普通だよな。

玄関の前、気になる人影、いや、後ろ姿が見えた。

「何やってんだ？」

「うるさい」

「何やってんだ？」

「うるさい！」

何だこいつ。

「何……やってんだ？」

「私の上履きが無いの」

「いじめ……か？」

「さあ、そうかもね」

イマイチ事の重大さに気付いてないようだな。いじめか……上履き隠しなんて生で初めて見たぜ。

それにしても、こいつがいじめられるようには見えないけどな。背は女子として平均的な高さだろう。顔は綺麗なパーツが並んでいて、目は少し凛々しさがある目。髪は腰の方まで垂れていて、綺麗な髪だ。

見た目でいじめられたりしないタイプだと思うけどな。

「まあ、今日はスリッパでも借りて過ごせよ。何かあったら俺に言ってくれ。同じ学年だろ？ そのリボンの色だし」

そつえば、こんな奴俺の学年にいたか？ 見た事なかったな。

「分かった。あとさ……」

「何だ？」

「私と友達になってくれるの？」

「ああ。別にいいよ。どうせ俺は暇人で遊ぶ相手も特にいない悲しい人間だからな」

「私、藤森千代。貴方は？」

「古河正晴。ほら、チャイム鳴るぜ。早く行くぞ」

「うん」

新学期早々変な奴に会ってしまったな。まあいいか。どうせ俺も暇人だし、いじめる事には興味無いしな。

今日から高校2年。クラスも新しいクラスだ。

千代は「スリッパ借りてくるから」と言って職員室へと走っていた。

新学期からついてない奴だな。ドンマイ。

新しいクラスになっても、どうせ俺に知り合いは殆んどいないし、同じクラスになった隅原幸助とは中学からの腐れ縁的な感じだし、特に変わった事もない。実に普通な新学期だ。

ただ、今教室に入ってきた奴を見た時の気持ちを除いてはな。
ガラガラッ

教室のドアを開ける音が聞こえた。何気無くそつちを見てみると……そこには千代がいた。スリッパをちゃんと履いて。

まさか、同じクラスになるとはな。運命とも信じてしまつような気持ちだ。

だが、もう一つ気になる事がある。教室の空気が一気に冷たくなつた気がした。

俺の気のせいかな。そうであればいいんだけどな。

そして新学期初日終了チャイム。

さつさと家に帰ろうと思ひ、下駄箱に向かつたまでは良かったが、会つてしまった。また、困つたような雰囲気醸し出している奴に。

「今度はどうしたんだ？」

「靴がない」

「ほお、これまた困つたな。どうするんだ？」

「帰れない」

「だよな。だから、どうするんだ？」

「帰れない」

「分かつたよ……」

話にならないな、全く……どうするか……

「家まで送つてやるのか？」

「どうやって……？」

さあどうしよう。言つたはいいが手段が分からない。考えずに言つた俺の責任だ。どうしよう……

「……んぶ」

「え？ 何だつて？」

「……おんぶ」

「真面目に言つてるのか？」

「……そのつもりだけど」

参ったな。まさか、いいや、別に驚く事では無いな。そうではあるが、やはり反応してしまう。

女の子をおんぶなんて、なかなか出来た事じゃない。しかも家までって……遠かったらどうするつもりだ？

「お前、気が強そうだけど意外と甘えるタイプなんだな」

「うるさい！ 黙れ、黙れ、黙れ！」

酷い説教だ。単語殺しの強制的シャラップ攻撃にあっている。素直になればいいのに。

「ほら、俺はもう喋らなくても良いから、早く行くぞ」

争っても仕方ないから、俺はしゃがんで手を後ろに出した。

千代はすぐには乗らず、数秒経ってから俺の背へと体を預けた。

前を向いていたから顔は見えなかったが、一体どんな顔をしているのだろうか。

「……お願ひします……」そんな声が聞こえた気がしたが、気のせいだろうか。

出会いはいつも突然。

それでも、産まれたからには出会いは必然。

君に出会ったから、別れは必ずあるんだね。

2章 家無き子

2章 家無き子

藤森千代を背中に背負って歩いている訳だが、いくら歩いても家に到着しない。一体こいつの家は何処にあると言っただ……学校の近場じゃない事は分かったが、最寄り駅が隣の街という学校に通っているのだから、きっと家はそんなに遠くないはずだ。なのに全く到着する気配がない。千代もただ「右」、「左」と方向を教えてくださいだけで、会話はほとんどしていない。

でも、千代の手はしっかりと俺の体の前で結ばれていた。嫌われではないようで何よりだな。

「なあ、1つだけ聞いていいか？」

「何？」

「お前の家は一体何処にある？ 歩いてても歩いてても到着しないぞ。

まだなのか？」

「まだまだ……」

「そう、か……」

まだか……普通に聞き流していたがこいつは今俺にとって地獄のような言葉を言い放ったのだ。それでも突っ込みを入れたり、愚痴を言えばいいとなるが、それが出来ないほど、千代の声は暗く落ち込んだ空気が大気を揺らし、俺の心をも侵食して揺らした。

まだ、俺に強くしがみついている。その拳の強さは掴むという状態維持の加減を越し、怒りや悔しさの類のもののようにであった。いや、実際そうなのかもしれない。

「なあ、あとどれくらいで着くんだけ？」

「もういいよ。その公園でお別れして……」

「でも靴は……？」

「大丈夫、すぐ着くから。ここまで運んでくれてありがとう。じゃ

「あね」

「すぐ着くならそこまで行くぞ？」

「いいの！ 大丈夫だから……心配しないで」

「そんな事言つても……」

「早く！ 言う通りにしないと私一人で貴方をいじめるわよ！」

「それは嫌だな」

「じゃあ振り向かずに来た道を戻って……じゃあね」

そして、この虚しさの塊のような言葉を吐いた千代は靴の無い両足のまま、公園へと走っていった。

いじめられるのは嫌だからな。俺も帰る事にした。自宅に向かって来た道を振り向かずに。

家についても寝る事が出来ない。勿論、睡眠時間を削る悪徳業を働かせているのは今日の出来事だ。

気にしないで寝れる人間は殆んどいないだろう。少なくとも俺はそう思う。

そんな事をずっと考えていて、気付けば小鳥は鳴き、優しい陽の光が窓を透き通し俺を射していた。

寝ずに学校はなかなかダルさを感じる。

そんな中、この体調不良を訴え今にも休息、臨時休校を恵む俺の脳内を痛め付けるように騒がしい声がるさくざわめき始めた。

「正晴！ 遅刻じゃないとは珍しいね。何か心機一転、運命の出会いでもあったのか？」

「ああ俺の心に何かか聞こえる。騒がしいセミの声だろうか」
「酷いな、この野郎！」

と、幸助が姿を現したのだった。こいつと比べたらセミの鳴き声などオペラ歌手勢揃いの合唱団のように聞こえる。

「珍しく遅刻じゃないわね。まあ、それが当然なんですけどね。そうだよな？ 古河正晴くん？」

「はい、委員長。その通りであります」

「じゃあ、これからはもう遅刻は無しになるわよね」

「そのようになる事を願うばかりでありますな」

「遅刻するなあ〜！」

「はい！」

朝から委員長の橘瑞希にまで会ってしまつとはな。朝というのはこんなにも騒々しいものだったとは、知らなかった。

やはり遅刻をしないという事は俺の精神衛生上の問題や健康状態維持システムのエラーに通じるのではないだろうか。いわゆる、ウイルスだな。俺は凄腕ハツカーではないから、そのウイルスと第三次世界大戦的な息を飲む攻防戦は出来ないだろう。敵軍は身の回りの関係者二人に有り。直に消滅もしくは逃避しなければ脳内システムまでもが侵食されてしまつ……

と、くだらない事を考えている朝の俺であつた。本当にくだらない。

下駄箱に辿り着いた所で何気無く千代が学校に来ているか確かめてみた。まだ、来ていないらしい。どうやって学校に来るのだろうか、靴が無いはずだから。

まあ、他にも靴くらいは持っているだろう。心配はいらないな。

朝のホームルームの始まりを告げるチャイムが鳴る。

クラスにいる生徒達はそれぞれ友達との会話そこそこのオチをつけ席に着席した。

そして、担任の先生が教室に入ってくる。これでクラス関係者は8時ではないが全員集合だ。唯、一人を除いては……

今日、千代は休みらしい。担任が「誰か連絡を聞いている奴はいるか？」と聞いたが、質問の答えは皆無。興味すらないように聞き流していた。俺としてはいい気分はしない。千代はきつと風邪を引いたとかじゃないのだろう。きつと理由は他にある。俺はそう思うね。

「委員長、俺もう帰っていいか？ 急用が出来て……」

「学校にいるのに家の急用が伝わってくるとはね。アンタはテレパシーでも使えるわけ？」

「そうなんだ……今まで黙ってたけど、俺は超能力者なんだよ。サイコキネシスや瞬間移動、そんなものは自由自在に使用可能だ。スプーン曲げなんて触れずに出来るくらいだ」

「あら、じゃあ今度見せて貰おうかしら。その超能力とやらを」

「……腹が痛いんだ。早退していいか」

「いい加減諦めなさい！」

ちくしょう……なんとくだらない言い訳しか思い付かないこの老いて腐ったバナナのような思考をどうにはしてやりたい。

「じゃあ、委員長。保健室行ってくる」

「先生には仮病と伝えておくわ」

「おう、サンキュー。宜しく頼むぜ」

と、なんとなくくだらない会話もそこそこに、俺は保健室へと向かった。

熱っぽい、と保健の先生に伝え、体温計を受け取った。勿論、熱は平熱健康安全異常無しなので、生きていく為の知恵とやらを……生きていく中で殆んど使わないと思うが、脇の下で体温計を擦って摩擦で熱を出そうという悪知恵を働かせた。先生はパソコンと奮闘中なので見ていない。

俺は体温計を必死に擦った。

そして、無事帰宅を許される事に。

と、言っても向かう場所は勿論家ではない。あの公園へと足を運んだ。

「千代、居るのか？」

呼び掛けてみるがやはり返事はない。まあ恐らく家にいると思う。俺は千代が行く場所なんて此処しか知らないから仕方無くこの公園に来るしかなかった。

他に何処に行けばいいのやら。会おうと思ってきたわけだが、会

ってどうする気だ？ 千代に会って俺は何をしようというのだ？
何故会いに来た？ 心配になった。休みだと聞いた時、何故か猛烈に心配症ではない俺が心配で満員状態のような気持ちになってしまった。

だが、会って何をやる。ただ会いに来ただけか？ それすらもよく分からない。理由を気にする前に会えるかどうかも分からない。それでも俺は公園に来た。きっと本当に衝動に刈られた気持ちに此処まで連れてこられた、そんな感じだろう。名前を呼んでも居ないとは思っている。しかし、腐ってずっと前にひねくれてしまった俺の心の中にもまだ希望という光があるようだ。もしかしたら居るかもしれない、と思える心をまだ持っていた。それに気付けただけでも多大な収穫だ。

「千代、居ないか？ 居たら返事してくれ」

再び無言。通信は何度も何度も試みた。だが、応答はなく、返答を返してくれる存在は居なかった。まあ、なら風邪を引いて休みつて事にしておこう。俺が心配していただけた話だ。

「……何？」

丸で、成仏をしたいがその方法が分からず、未だにこの現代社会まで居過ぎしてしまった幽霊の類のような声が聞こえた。

「千代……か？」

俺は誰の姿も見えない公園の中で少し大きめに声を出した。

そうしなければ届かない気がしたからだ。

「千代、何処だ？ 何処に居る？」

そして気が立ち並ぶ並木の間からその姿は現れた。昨日同様、制服姿で靴を履いていない姿だった。

「千代……お前学校はどうしたんだよ？」

「それはこっちの台詞よ。アンタこそ学校行っているはずの時間帯でしょ？ 何やってるのよ？」

「理由という理由は見つからない。でも、お前が心配になったってこの理由にしておこう」

「……バカ」

何だか分からないが何なのだろう……この雰囲気。昔、経験したような温かさを感じる。

気のせいだろうか……

「靴、あれ以外に持ってないのか？ 家に無いのか？」

「……無いの……」

「1つもか？」

「……無いの」

「そ、そうか……仕方無い。俺が買ってやるから、行くぞ」

「……無いの……何処にも無いの……」

どうしたんだよ。千代は突然泣き始めた。声にならないような呻き声に鼻を囁る音がただ聞こえる。

「無いんだろ？ だから買ってやって」

「私には……家も何も無いの……」

悲しみを分け合えたなら 同じ意味の涙を流せるのに

3章 春に来るサンタクロース

3章 春に来るサンタクロース

空は赤く染まり始めていた。青く広がっていた陰を少し残しながら赤く染まっっていく。

公園も赤を帯びた色に変わり始め、二人の姿を包み込んでいく。
無言。

その、時の流れは長いようで短く感じた。向かい合う姿の中、二つの影は動きを無く、お互いの目を見詰め続け笑う事の無いにらめっこをしているかのようだ。

そして、千代の言葉が長い沈黙を切り裂いた。

「分かったでしょ？」

「まだ納得は出来ないけど、かなり大まかな事は分かったかな」

「じゃあ、もう用は済んだわね」

この状況で何も言わずに帰る奴は殆んどいないだろう。

知り合いが家が無いと言っているのに、簡単に帰れるかよ。

まず、家が無いってなんだ？ 家が無い。そのままだって事は分かっている。分かっているが、家が無いとなると聞かなくやいけない疑問が山のようにある。

何処に住んでいる？ それが一番聞かないといけない事であろう。

「じゃあ、何処で生活しているんだ？」

「いろいろ」

「……分かった。深くは触れない事にする。だが、家無き子となるとほっとく訳にはいかない。何処かしっかりした生活場所が必要だろ？ 女の子だし、まあ……それなりに可愛いし……とりあえずほっとく訳にはいかない！」

「あら、余計な心配ね。私は大丈夫よ。今までもこうしてきたのだから」

お前が大丈夫でも、俺の気分が落ち着かず大丈夫ではないのだよ。女子高生とは、こんなに不安定で危ない生活をしているのか？ いや、俺が知っている女子高生とは何光年も遙か彼方に離れている存在だと俺は確かに思う。これは、もう確信だ。

「とりあえず、俺は心配だ。頼むから俺が安心するような場所にいてくれよ」

「此処じゃダメなの？」

「昨日からずっと此処にいたのか？」

「そうよ。正確に言うとなカ月前から」

「それはそれは……平気でいられるお前を俺は尊敬するな。が、それは間違えた事だ。此処にいる事自体現実離れした超現実だからな。此処にいられる精神は凄いが此処にいる神経は尊敬出来ないな」

と、よく意味の分からない事を言ってみる。本当に自分でも分からないが、千代には何かを伝える事が出来たらしい。無言のまま俯いている。

「とにかく、お前が今まで繰り返してきた当たり前の日常は当たり前じゃないんだよ。もっと健康的、平和的、人間的に生きようぜ」

「それが出来ないから、こうなのよ」

仰る通りだ。誰も好んで公園生活をしないだろう。俺は何を言っているのだから、俺が知りたい。本当は言いたい言葉があるはずだ。でも、それに限っていつも口は拒絶反応を示し、一度も二度も外へ出す事を許してくれない。人間という生き物は機械よりも鈍く上手く出来ていない。

言いたい事なのに言えないとは変な話だ。

「もう用は済んだわね。なら、早く帰りなさい。私としても良い事なんて一つもないわ」

「そんな事言ってもだな、見捨てられない生活をお前がしているんだよ。ここまで真実を知ってそそくさと家に帰れる訳がない」

「じゃあ、何をするつもりなの？ 私に何かくれるの？ 可哀想だから？ 嫌ね」

「ああ。じゃあ、帰るよ。最後に1つだけいいか？」
「何よ？」

「サンタはクリスマス以外でも仕事はするんだぜ」

「はあ？ もしかして頭おかしくしたの？ 病院をオススメするわ」

「それはサンキュー。じゃあな」

そう言つて、俺は公園を後にした。俺に出来る事は何かあるはずだ。別に千代に好意を抱いているわけではない。

ただ、人をいじめる事には興味がないし、なら、いじめられている人間がいじめに打ち勝つ所を見てみたい。千代には悪いがゲーム感覚に思っている。

さて、明日はどうするか。

その日、俺は家に帰って早目に睡眠をとった。

前日、睡眠をとらなかつたせい、体は思った以上に深夜への突入を避け、もう休ませろ、と言わんばかりに動きを鈍らせベッドへと体を埋めた。

まあ、俺も今日は早く寝ようと思つていたところだ。好都合で何よりだ。

翌朝、遅刻をするなど強引な約束を結んでしまったので、初日ぐらいは守つてやるか、と早目に学校へと足を進ませた。

教室に着いたのは良いがまだ誰も来ていないらしい。この時間には誰も来ていないのか、覚えておこう。

早く来すぎたらしい。校庭には点々と登校してくる生徒の姿が見える。暇だし、うろろしてくるかな。と、いつもは行かないようなところまで学校を周つてみる事にした。まだ誰も知らない未知なる発見があるかもしれない。そんな期待は特にしていないが。

廊下にも生徒の姿が良く見当たるようになってきた。そろそろ皆登校してくる時間らしい。

俺はゆっくり、しかし足は早足に教室へと向かった。教室には瑞

樹と幸助がすでに登校してきていた。

「古河正晴が……これは夢なの？　そうよ、これは夢だわ！　嫌だ私ったら〜」

と、瑞樹が自分に納得させるように語り掛けていた。全く、他人を下に見すぎだ。俺が早く登校してきただけで、ああなるなんてどれだけ俺を馬鹿に見ていたんだ。

「分かった、分かった。夢にでもしておけ」

「ええ、夢だわ」

こんなにパツチリと目が開いているのに夢を見ているのか。これは神業なのかもしれないな。今度、ビツクリ人間のテレビにでも出ればいい。視聴率は見るに耐えないであろう。

教室内はほとんど人口密度が濃くなっていく。それが通常正式な状態だったはずなのだが

、1番に学校に来た人間から見たら、人が増えていくのは変な感覚だったようだ。今、初めて知った。どうでもいい知識だが……

朝はまだ陽の背は低かったが、今窓越しに見る陽は俺達を見下ろしている。早起きをするとは分かる事は沢山あるようだ。

ホームルーム開始のチャイムまで、あと5分。クラスメイトはほとんど集まった。それぞれの仲の良い友達と話している。賑やかに聞こえるがこれが学校の音なのだろう。そんな事を考えたのはこれまた初めてだ。今日の俺はどうやら頭の回転が変に良いらしい。

俺も席の近く、嫌ではないが残念ながら席が近い幸助と瑞希と話をしていた。これもいつもの光景。至って普通だ。そして、時計の針は急がず焦らずチャイムを鳴らそうとその時間に近付いていく。

その時、小さく教室のドアが動いた。それから徐々に徐々にドアは開いていき、とうとう、完全に開かれた時、その姿は見えた。俺はついガッツポーズでもしてやろうかと思った。

そう、ご想像の通り、そこには藤森千代がいた。学校に登校して来たのだ。クラスの奴等はずっと彼女を見詰める。鋭さを隠しているが何処か冷たい沈黙の視線の時間。

千代は席に着いた。そして、チャイムが鳴る。

その日はいつも通り、普通に流れていった。

放課後、俺はさっさと帰ろうと席を立つと「ちょっと」と声を掛けられた。勿論、声の発信源は藤森千代だ。

「なんだ？」

「ちょっとアンタに話があるのよ」

「そうかい。で、なんだ？」

「サンタクロースは春にも来るみたいね。朝起きたら頭の横に綺麗にラッピングされた箱が置いてあったわ。最初は爆弾かと思ったけど開けてみたら靴が出てきたの。私に似合いそうなスニーカーがね。全く、今までで一番厄介ないじめだわ。嫌になる……」

「それはそれは、お気の毒に。今度からは睡眠中に頭の辺りを気をつけるんだな」

「そうするわ」

「そうしな。じゃあ、俺は帰るぞ。サンタはいつも暇だけだな」

「バカ……」

そして、俺は教室から出て行こうと足を前に出して歩いた。

今日も疲れた。暇人でも疲れる事はあるんだな。また、勉強になつたぜ。

その時。担任の教師に「職員室に来るように！」と呼び出しを食らった。俺が何かやらかしたか？ 心当たりはある。きつと、昨日瑞希が本当に「仮病で帰った」と言ったのだろう。面倒な奴だ。言い訳を考えるのにも一苦労だ。まあ、本当に熱があったと言っておこう。問題無い事だ。

今、後ろから聞こえてきた言葉が俺をそんな気にしてくれた。

弱弱しいが感情が籠った女の子の声が鼓膜に響く。心にも響いてくる。

「ありがとう！」

今夜また星の下で

4章 孤独のユビキリ

4章 孤独のユビキリ

すっかり千代と一緒にいる事に慣れてしまった俺は、今日も学校帰りに千代と歩いてた。

何度も気を付けると言っても、「余計なお世話よ」と、話を流しては、また、公園へと行くのだった。ほっとく訳にはいかないのだが、本人が否定するのだから、まだうるさくは言わない事にしている。

最近はいじめの事をよく聞かないが、いじめていた奴等も懲りたのだろうか。

それとも、千代が隠しているだけだろうか。

それも心配だが、もう1つ心配事が増えてしまった。どうやら、俺と千代が付き合い始めたという噂が出回っているらしい。まあ、事実上付き合っていないのだから、気にする事はないだろうけど。勝手に言わせとけばいい、ということだ。俺は友達関係というものがあまりないから、否定を申し上げる為に意見を渡す相手がいない。幸助と瑞樹だけしか話し相手がいないからな。

その二人すら多大な会話は交わしていない。ただのひねくれたガキって事だ。

幸い、いじめられてはいないが、1人でいるというところは千代と同じだ。本当に1人だということは、千代には言っていない。

俺の家族は俺が中学に行っている時に俺をこの世において自殺した。だから、千代は身近に感じる。

毎日一緒に帰ったりして、会話を重ねてきて気がおかしくなっていたのだろう。俺はゲームだと思っていたいじめを解決してやるうという気持ちを生み出してしまった。

それが普通なだけだな。この気持ちは何かが違う気がする。

今日も俺は千代と一緒に帰っている。いつも、俺は公園まで行って、家に戻る。特に理由を考えようとは思わないが、何故いつも千代と一緒にいるかは、自分でも疑問だ。

「なあ、千代」

「何よ。最近ちよつと馴れ馴れしいわね」

「そんな事ないぞ」

「そんな事あるわ」

はいはい。

「つで、1つ聞きにくい事を聞きたいんだが、いいか？」

「返事を返せる範囲ならいいわ」

「じゃあ、無理ならシカトでもしてくれ。千代、もし、いじめが無くなったらどう思う？ お前が1人でいじめなれなくなったら、どう思う？」

「……別にどうも思わないわ。ただ、厄介なのが無くなるだけよ」
明らかに動揺してるよな。素直なんだか、どうなんだか。

「俺はお前を助けようと思うんだが、どう思う？」

「ヒーローにでもなりたいの？ ちよつと似合わないと思うわよ。もつと、自分の事を知ってから言いなさいよ」

即座に否定。まあ、分かっていた事だが、やはり実際に言われると傷も微かに付くものなんだな。

「ヒーローとは考えてなかったが、それもいいな。俺はヒーローになろう！」

「アンタなんかは何万という人々を助ける事なんて出来るのかしら？ 出来るとは思えないわ」

「誰が何万もの人々を助けるヒーローになるって言った？ 俺はお前だけのヒーローになってやるうって言ってたんだよ」

「何言ってるのよ！ 全く……」

千代は照れたようにそっぽを向いて、こちらを向く事は無かった。千代は1人だ。俺も1人だ。それなら二人になれるじゃないか、そ

趣味があるのなら謝るわ。ごめんなさい。でも、その趣味は人前で披露しない方がいいと思うわ」

そんなに人を馬鹿にして何が楽しい？

「アンタ、何見てるの……よ……」

千代の声量がフェードアウトしていき、暗さを醸し出した。

「何それ……」

「どうやら、俺は本格的に千代の仲間になったらしい。まあ、これで千代も1人じゃなくなるな」

「バカ！」

詳細を説明すると、俺の下駄箱の中に入っていた1枚の紙。これが全てを表している。その紙に太字で書かれた文字が眼球を破って侵入してやるうってほどに強い殺気のようなモノを出していた。

『犯罪者の仲間。あいつと一緒に死ぬ』

さてさて、特に大きなショックも受けなかった俺だが、1つ気にかかる事がある。俺は犯罪者のお友達は残念ながらないぞ。ホームレス女子高生の友達、の間違いじゃないのか？ まあ、それもいい気分ではないがな。

はて、俺はいつ犯罪者さんとお知り合いになったのだろう。思い出に繋がる回路をマイナス方向へ進んでも、ピリツとくる電流みたく思い出しはしない。下駄箱でも間違えて入れたんじゃないのか？ 全く、それなら大きな迷惑だ。

「……ごめん」

「何で、千代が謝るんだ？」

「たぶん、その犯罪者って私だと思う……」

「何故だ？ 万引きでもしたのか？」

「違う……私の両親は殺人を犯してしまった犯罪者だったの。二人とも死刑になって、私は犯罪者の子供だって避けられてきたわ。両親は最後に家とか全部売り捌いてその残ったお金を私に渡して刑務

所に行つたわ。それから私は1人。私と同じ街に住んでた人達は私を犯罪者と呼んで避けるようになって、今もそうなの……」

「千代、俺はお前を守る。どんな奴からだって、俺はお前を守り続ける」

「何言ってるのよ……」

「必ず、守るからな！」

決意が固まる朝の時。

裏切る事のない、約束を結んだ。

5章 満身創痍の共感

5章 満身創痍の共感

手紙は毎日のように下駄箱へと入れられていた。毎回処分するのが面倒だ。もっと、手間のかからない脅迫状の送り方は無いものか……いや、脅迫状自体、あつては困るのだが、そこはもう逃れられないから、気にしてもしょうがないだろう。

「千代、さつさと帰ろうぜ」

「アンタはまだ私に付きまとうつもりなの？ 私に近付いても良い事はないって思い知ったでしょう？ もう、やめなさいよ」

「別にいいだろ。俺が好んで一緒にいるんだから」

「……全く、何言ってるのよ……」

こんな事言っても、お互いいじめられてるのは解決しなくちゃいけないよな。俺もこんな事がずっと続いたらストレスがピークに達して学校で暴れそうだな。

もしかしたら、千代は凄い精神力なのかもしれない。その点ではかなりの尊敬をします。

それにしてもだ。どうやって解決するかが問題だな。俺をいじめてる奴を突き止めれば自然と千代をいじめてる奴にも辿り着くだろう。どうしたものか……

ああ、これはもう、勝負に出るしかない！

翌日、いつも通り千代と登校した。

下駄箱の前、千代は毎日、固唾を飲んで俺が下駄箱を開けるのを待っている。

今日もそうであった。

「何やってるのよ？ は、早く開けなさいよ！」

「分かったよ」

俺は下駄箱をそつと開ける。

そこには、最近、常に入っていた脅迫状のような手紙が今日が入っていた。入ってなかった。

千代は少し驚いたような顔をしている。その後、「……良かったわね」と小さく呟いた。俺に向けて言っているより、自分自身に言っていると思った方が正しいであろう、声の音量で。

その後、教室に行つてから千代と話す事はなかった。いつもなら一言、二言は何気に交わせるのだが、今日は全くの皆無だ。千代は一人で机の一点をじつと睨んでいる。怖いって。

放課後。

俺は屋上へと向かった。大事な用事があるからだ。

屋上のドアをゆっくりと開ける。その先には、待っていました、と言わんばかりの腕組で立っている奴がいた。

「悪いな、遅れて」

「いいや、別にいいんだよ」

「俺から呼んだのにな。これは、悪かったよ。本当に謝る。礼儀としてな。ただ、これから本当に謝ってもらうのはお前だよ。なあ、そつだよな、幸助」

「俺は悪いとは思ってないんだけどね」

「それは、困つた事だな」

こいつは、自分の罪を実感していない。認めようともしていないようだ。

詳細を説明すると……

昨日の放課後。俺はいつも通り、千代と下駄箱まで行った。下駄箱を開け、スニーカーを取る。そして、一枚の手紙を代わりに入れた。内容は「明日、放課後になったら屋上に来い」と書いた紙。この下駄箱は俺しか使っていない。だが、もう一人、俺の下駄箱の中をいつも見ている奴がいる。そいつにしか見つける事の出来ない手紙だ。そいつは、俺の下駄箱に脅迫状を入れる時、俺が入れた手紙

を見る。そして、今、屋上にいる事になる。
つまり、全ての犯人は俺の唯一の友人、隅原幸助、という事になる。

俺は残念に感じるが、仕方無い。こんな、いじめは誰が犯人だろうと許せないからな。

「幸助、いじめは今時、ダサイと思うぜ？」

「そうかい？ 俺はお姫様を守るような王子様も今時、流行らないと思うけどな。おい！ いるんだろ、犯罪者！ 出てこいよ！」

屋上のドアが開いて、千代が出てきた。どうやら、俺についてきて一部始終を見ていたらしい。

「この犯罪者は覗き見までするのか。全く、早く刑務所に行けばいいんだ。この世界にお前みたいな汚れた馬鹿は要らないんだよ。そのくらい、自分で理解しろよ」

今までに聞いた事のない幸助の喋り方。これがこいつの本性だったのか……ショックだ。

「幸助、お前はなんでそんなに千代を恨むんだ？ 何かあるのか？」

「俺の妹は小さい頃に殺された。こいつの親が押し掛けた銀行に俺の母と一緒にいるところをな。意味が分からないぜ。なんの関係も無い人を殺すなんてな。だから、俺はこいつを許さない」

「だからって、千代が殺った訳じゃないだろ。こいつは犯罪者でも何でもない。ただの女子高生だ」

「うるせえ！ この野郎！」

幸助は走り寄って、右腕を大きく挙げて俺の顔をおもいつきり殴った。

「正晴！ 大丈夫？」

「近寄るな！ これは俺が売った喧嘩だ。千代には何も関係ない。そこで大人しく見ててくれ」

「でも……」

「大丈夫だよ。俺が死んだら、今住んでる家をやるよ」

「縁起でもない事言わないでよ！」

「悪かったな」

「最後に1ついい？」

「何だ？」

「また、一緒に学校行って、一緒に帰りたい。だから、絶対にその人を殴らないで。退学にならないようにして。お願いだから……」

「わがままなお姫様だな。お安いで用だ」

「何を話してる！ 犯罪者は早く刑務所に行けよ！ この野郎、王子様気分になりやがって！ ああー！」

「痛えな……こっちは攻撃無しに防御一途の戦い方だぜ？ そんなに続けて殴るな……」

「ああー！ 殺してやる！ ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！ ああー！」

その姿は悲しく見えた。抑える事が出来なかった感情を他人にぶつけている。

それも度が過ぎてている。もう、俺だって、目が開いてる事が何とかなんだ。余裕なんて言葉は存在しない程の身体中のアザ。

「やめて……もう、やめてよ！ 私は犯罪者でいいから！」

「駄目だ！ 千代、お前は犯罪者じゃないだろ！ そんな事言うな！」

ふざけるなよ。俺が殴られてる意味が分かんなくなるだろ。

「ハア……ハア……どうした、幸助、もう終わりか？ 俺はまだまだ……」

「この野郎！」

幸助の右フックが俺の顔にピンポイントにヒットした。こればかりは耐えられず、俺は倒れた。

「この野郎！ この野郎！ この野郎！ この野郎！」

幸助は倒れた俺を何度も蹴ってくる。千代は涙が混ざった声で「やめて……やめて……」と繰り返し言っていた。

その時、ガチャ。

屋上のドアが開いた。

「…………… 幸助！ 何やってるのよ！」
橘瑞樹だった。どうやら、幸助を探して学校中を探し回ったらしい。息切れしている。と、言っても、俺は殆んど意識がない。ここから先の記憶は無く。

起きたら病院のベッドで俺は寝ていた。

「…………… 良かった…………… 正晴、大丈夫？」

「まあ、ちよつと身体中が痛いけど、平気そうだ。どうしたんだ俺。屋上にいたはず……………」

「それなら……………」

千代は俺が意識を失った後の事を教えてくれた。

瑞樹が来たところまでは、何とか覚えている。その後、瑞樹も幸助と一緒に千代を恨んでいたという。幸助と瑞樹は付き合っていた。でも、倒れてボロボロの俺を見て瑞樹は「…………… もう、やめようよ、幸助」と言ったらしい。幸助は最後に俺を思いっきり蹴って屋上から出ていった。

俺が意識がないからって蹴るなよ。痛さは感じなくても傷は残るんだよ。

「最後に橘さんが、『ごめんなさい、もう貴女にこんな事はしないわ。幸助にも厳しく言っておくから』って言ってたわ」

「そうか。じゃあ、もうこんな事は起こらないんだな」

「うん」

「良かったな。ちゃんと約束は守ったぞ。俺は千代を守った。約束を守るっていうのは、こんなに嬉しい事だったとはな」

「…………… バカ」

「俺、何で千代を守ろうと思ったんだか、やって分かった」

「何？」

「千代が好きだ」

そう、俺は何だかんだ言っただけで千代が好きだった。こんなホームレス女子高生に恋をしていたんだ。

「……バカ。私も正晴が好きなんだから！」

「そうか、それは有り難いな。振られたらどうしようと思ったよ」

「……バカ。振るわけないでしょ」

「さっきから、バカって言い過ぎじゃないか？」

「そんな事ないわ」

「そんな嘘つくなよ。」

「なあ、千代」

「何よ、バカ」

俺はそんなにバカなのか？

「俺と一緒に暮らさないか？俺は今、一人暮らしだ。だから、もう千代があんなところで寝泊まりしてるのは見たくないし、……側にいて欲しいから」

「……バカ！バカ！バカ！バカ！」

こんなにバカにされたのは産まれてこの方、初めてだ。

「……退院したら、正晴の家に行ってあげるわ」

「そうか、分かったよ」

いつ退院するかは分からないが、その時が来たら、俺は本当に千代を守っていこう。

俺は千代が好きだから。

6章 今夜また星の下で

6章 今夜また星の下で

病院は涼しかった。それはそれは、風邪を引いてしまっかのように。俺の退院の予定は未だに決まったなく、病院生活を満喫とまではいかないが、のんびりと暮らしていた。

千代もお見舞いには毎日来てくれた。千代は俺の家に暮らしている。俺はまだ家には戻れないが、退院したら一緒に住もうと約束をしたから。

いつものように、千代は笑顔で果物を剥いてくれたり、元気に話したりしてくれた。ツンデレっぽいところは未だに変わってはいないが。

「正晴、部屋の掃除勝手にしちゃったから」

「俺の洋服とか捨ててないだろうな？」

「ダサイのは捨てちゃった。あと、女の子がパッケージのいろいろな物とかも」

「何?!」

女の子のパッケージとは、あれに違いない。二次元の物もあったし、「誘惑の教室」や「女教師の特別授業」、「小さい体で頑張りましゅ!」などといった実写ものまで……見られてはいけないものがあつたことを忘れていた。怖い……千代の顔を見ることが出来ない。

「そ、そ、そ、それは……」

「全部捨てちゃったから」

怖い……

「だって……わ、私という存在があるんだから……」

「……千代」

「う、うるさいわね! なんでもないわよ!」

正直者だ。そんな千代のことを俺は好きだ。好きで好きでどうしようもない。

「じゃあ、私は帰ってまた掃除の続きするから」

「あ、ああ頼むぞ」

「じゃあね」

病室のドアが閉じて千代の姿が見えなくなった。そこには温もりと寂しさが残った。千代がいない生活には慣れることは無いだろう。

「古河さん、検査しますよ。こっちにきてください」

「はい」

「まだ頭は大丈夫？ 今日は何も異常は無い？」

「はい、何とか」

そう、俺は千代に隠し事をしている。

それから、似たような日々は数週間続いた。

「正晴、今日やっと掃除全部終わったよ」

「掃除？」

「掃除してるって言ったじゃない。1ヶ月も掛かるとは思ってたけど、すっかり片付いたわ。あんなに汚かった部屋がね」

「俺の部屋はそんなに汚かったか？」

「覚えてないの？ 汚かったんだから！ それはそれは、昆虫類も驚くほどに……」

「そうか……」

それから、他愛も無い話をして、千代は帰るといった。

「千代」

「何？」

「俺はどんな事があってもお前を好きでいるからな。それだけは絶対に覚えていてくれ。例え俺が忘れても……」

「何言ってるの？」

「とにかく、俺は千代が好きって事だ」

「そ、そう……私も正晴が好きよ」
そして、千代は帰った。

「古河さん、喧嘩でこんな事になったんですか？」

「ええ、まああ」

「脳に傷が入ってしまったています」

「傷？」

「はい。完治するまでになくなっていきますよ」

「何がですか？」

……

「正晴、今日手術だよね？」

「たぶんな」

「ずっと待ってるから」

「わかった」

そう。俺は今日手術だ。脳の傷を治すための。成功しないかもしれない。いや、成功するかもしれないの方が正しいだろう。千代は俺の担当医に病気の事を聞いていたらしい。

「千代、俺はお前が好きだ。何が起きたって、俺はずっと好きでいる」

「それ、前も言った」

「そうか……」

「私も好き」

「俺は、また千代を絶対に好きになるから」

「……うん」

手術。

赤い照明が消える。

運ばれていく体。

今夜また星の下で

病室に駆け出す女の子。

「正晴、起きた？」

「……………」

「私、藤森千代っっています」

「藤森……千代？」

「はい、あなた、古河正晴の恋人です」

俺はまた、好きになる。

6章 今夜また星の下で（後書き）

時間が無く、こんな文になってしまいました。読んでくださりありがとうございます。またの機会があれば、しっかりと話を展開でこの「今夜また星の下で」を連載できるようにしたいと思います。ありがとうございます。

今夜また星の下で

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5968d/>

今夜また星の下で

2009年3月24日11時01分発行